

取材積み重ねた特攻の記録

今日の日本が直面する憲法、年金保障、教育をはじめとする国家的課題に取り組み、日本再生に向けた活動を行っている民間シンクタンクの公益財団法人「国家基本問題研究所」(国基研)の理事長、櫻井よし子氏が選出された。



櫻井よし子理事長は、外国人による優れた日本研究で、第12回「国基研日本研究賞」で、特別賞に米国の歴史家、ロビン・L・リエリー氏が選出された。

国家基本問題研究所 第12回「国基研日本研究賞」



この本が日本で関心を得たのは、神風特攻隊に関する日本人が抱いていた疑問に答えたからだと考えています。日本軍は部隊と航空機、そしてその攻撃目標については当時の文書に記録を残しました。しかし、特攻隊員が任務を遂行したことができたのか、それともできなかったのか、特攻隊員の運命を知ることはできませんでした。この本は、この欠けている部分を埋めようとするものです。

「suicide (自殺)」という言葉は「カミカゼ」攻撃で使われる、主に西洋的な考えによるもので、現代における「自殺」は一般に鬱病や受け入れがたい生活状況の結果として、自分の手で命を絶つことと見なされています。

「第II部」では、組織的な特攻作戦が始まった昭和19年10月から終戦までの約10カ月間にわたって続いた特攻を、それぞれの米軍艦艇が受けた攻撃という視点から日付順に整理。一連の攻撃で損害を受けた米軍艦艇約40隻全ての事例を対象に、特攻機の動きや艦艇に生じた損害などを、当時の戦闘報告の引用などをも交えて詳述する。

本書の目的は「乗組員の個人的な歴史を掘り下げる」ことではなく、あくまで攻撃の規模の「記録」である。特攻機が一機また一機と艦艇に突入していくさまは、一切の調色を省いた淡々とした筆致で記述される。それがかえって特攻作戦の非人間性と特攻隊員の気高さを際立たせ、米軍兵が「カミカゼ」に抱いた畏怖を感じさせる。

翻訳者の小田部哲哉氏の貢献も見逃すことはできない。小田部氏は原著の翻訳に際し、日本側の資料と照合の上、それぞれの攻撃がどの部隊のものであるかを付記。体系的に整理されたことになった出撃後の特攻機の動きや最期が、小田部氏の尽力により初めて明らかとなった。

米軍資料に見る「カミカゼ」の真実

「日本研究賞」は国際的視野に立つて日本の在り方を再考する国基研の活動に賛同する寺田真理氏からの寄付を基に平成26年に創設された。対象となるのは日本に帰化した1世を含む外国人研究者で、政治、経済、安全保障、社会、歴史、文化の各分野で日本に対する理解を増進する研究に対して、近年に刊行、発表された日本語か英語の作品から選出されている。

「第I部」では、特攻の精神的・歴史的な背景として武士の伝統から筆を起し、特攻作戦の戦術や訓練、使用兵器など多角的な分析を通じて特攻作戦の全容をひもとく。

特別賞 米歴史家 ロビン・L・リエリー氏



1942年生まれ。米ニュージャーシー州で32年間、高校の歴史教師を務める。沖縄戦当時、父のボブ・リエリー氏が米軍の大型上陸支援艇に乗艦していたことをきっかけに歴史の研究を始めた。62〜63年には海兵隊員として厚木基地に駐留。横浜の道場で、柔術と空手を組み合わせた神陰流柔術を学んだ。空手八段。海軍史や武道の歴史などに関する著書16冊がある。現在はヨーロッパの騎士道と日本の武士道を比較した新刊を執筆中。

つて祖国を守るために多くの若者が散華した、その心を忘れてはならない」と強調した。

その上でリエリー氏の著作について、「丁寧に取材を行い、特攻に記した一人一人に焦点を当てて克明に記録した貴重な作品だ」と称賛。「本書は米国人のリエリー氏が資料を集めて著したものを、日本人の翻訳者が補って完成させた。かつて敵として戦った国民が協力して特攻の軌跡を記録にとどめたことは意義深い」と評価し

彼らは勇敢な兵士だった

受賞の言葉

「カミカゼ」攻撃で使われる、主に西洋的な考えによるもので、現代における「自殺」は一般に鬱病や受け入れがたい生活状況の結果として、自分の手で命を絶つことと見なされています。本書の目的は「乗組員の個人的な歴史を掘り下げる」ことではなく、あくまで攻撃の規模の「記録」である。特攻機が一機また一機と艦艇に突入していくさまは、一切の調色を省いた淡々とした筆致で記述される。それがかえって特攻作戦の非人間性と特攻隊員の気高さを際立たせ、米軍兵が「カミカゼ」に抱いた畏怖を感じさせる。翻訳者の小田部哲哉氏の貢献も見逃すことはできない。小田部氏は原著の翻訳に際し、日本側の資料と照合の上、それぞれの攻撃がどの部隊のものであるかを付記。体系的に整理されたことになった出撃後の特攻機の動きや最期が、小田部氏の尽力により初めて明らかとなった。

「事実の重みを肅然と」

高池勝彦氏(国基研副理事長)



われわれは、第二次世界大戦末期、開戦が不利の中、戦局打開を期して日本軍が一身を捨てて連合軍と戦った「特攻隊」に特別な感情を抱く。戦いにおける決死の攻撃は、第二次世界大戦の日本決戦では古今東西、その例は少なくない。しかし、その規模と態様において、第二次世界大戦末期の日本軍の特攻作戦は、ほかに例を見ないであろう。

特攻隊は飛行機だけに限らない。本書では潜水艦からの人間魚雷など、攻撃を受けた艦艇の記録が日付を追って記述されている。この本が日本で関心を得たのは、神風特攻隊に関する日本人が抱いていた疑問に答えたからだと考えています。日本軍は部隊と航空機、そしてその攻撃目標については当時の文書に記録を残しました。しかし、特攻隊員が任務を遂行したことができたのか、それともできなかったのか、特攻隊員の運命を知ることはできませんでした。この本は、この欠けている部分を埋めようとするものです。

「カミカゼ」攻撃で使われる、主に西洋的な考えによるもので、現代における「自殺」は一般に鬱病や受け入れがたい生活状況の結果として、自分の手で命を絶つことと見なされています。本書の目的は「乗組員の個人的な歴史を掘り下げる」ことではなく、あくまで攻撃の規模の「記録」である。特攻機が一機また一機と艦艇に突入していくさまは、一切の調色を省いた淡々とした筆致で記述される。それがかえって特攻作戦の非人間性と特攻隊員の気高さを際立たせ、米軍兵が「カミカゼ」に抱いた畏怖を感じさせる。翻訳者の小田部哲哉氏の貢献も見逃すことはできない。小田部氏は原著の翻訳に際し、日本側の資料と照合の上、それぞれの攻撃がどの部隊のものであるかを付記。体系的に整理されたことになった出撃後の特攻機の動きや最期が、小田部氏の尽力により初めて明らかとなった。

特攻隊は飛行機だけに限らない。本書では潜水艦からの人間魚雷など、攻撃を受けた艦艇の記録が日付を追って記述されている。この本が日本で関心を得たのは、神風特攻隊に関する日本人が抱いていた疑問に答えたからだと考えています。日本軍は部隊と航空機、そしてその攻撃目標については当時の文書に記録を残しました。しかし、特攻隊員が任務を遂行したことができたのか、それともできなかったのか、特攻隊員の運命を知ることはできませんでした。この本は、この欠けている部分を埋めようとするものです。

来月9日に授賞式・記念講演会

第12回「国基研 日本研究賞」の特別賞に選ばれたリエリー氏の授賞式と記念講演会が開かれます。参加申し込みは以下の通り。

- 日時 7月9日(水)午後3時15分〜午後5時(開場午後3時)
- 場所 イイノカンファレンスセンター(東京都千代田区幸町2の1の1 飯野ビル4階)
- 会費 3000円(一般)、1000円(国基研会員)。当日支払制。
- 申し込み方法 国基研のホームページ(2次元コードまたは<https://jin.jp/>)からお申し込みください。当日会場での申し込みはできません。定員100人。応募者多数のときは抽選。締め切りは6月27日(金)。



への傾斜を強め、日清戦争(94年)や日露戦争(1904年)もこの動きを促進させました。

ある特攻隊員の回想によれば、日本の小学校では4年生から軍国主義的な道徳の授業が始まり、それが教育全般にわたります。彼が中学生になるころには生徒はゲートルを巻き、指定された場所に集合してから行進して登校しなければならなかった。

別の男性は終戦の4年前、福岡県の中学校に10歳で入学し、14歳のときにパイロット候補生として、九五式練習機で離陸訓練を受けました。生徒たちは飛行機を急降下させる方法も学びましたが、着陸方法は教わりませんでした。

生徒たちの年齢が若かったため、特攻隊員の任務を受け入れることは簡単でした。彼らにとって特攻隊員は国に奉仕する輝かしいことに見えたのです。

特別攻撃や「カミカゼ」という言葉は、日本で見方が異なります。日本では、若者たちは長年の洗脳教育によって、天皇は国家であり、その両方を守ることが自分たちの義務だと考えるようになったと理解されています。

米国人の中には、特攻隊員の動機が理解できない者もいましたが、ある米軍海軍の元水兵はこう話しています。「彼らは勇敢な兵士だった」

特筆すべきは、訳者が、原著の記録を精査してそれに訳を付していることである。たとえば、昭和20年4月13日、九式艦爆に攻撃を受けたとする米艦艇「ノリイ」の記録の訳注では「※九式艦爆は出撃していない」とし、実際には第107振撃隊(九七式戦)などであったことが付記されている。

この訳注がほぼ全ページにわたっている。また巻末には、訳者による特攻隊一瞥表などがつけられた。単なる訳ではなく「翻訳」としたゆえである。本書の最後に著者は述べている。「この意味で、特別攻撃は米軍の猛威を止めることはできなかったが、成功したとみることができる」と述べている。もちろんこれは、特攻作戦を賛美したものではなく、事実の重みを肅然と受け止めた著者の感慨であろう。